

「英語逆引き辞典：絶滅危惧種」

——語彙学習に最適——

大杉正明

「語の配列」

一般に、辞書というものは「語」を収録しているものなのだが、通常は「語頭」でそろえて配列している。英語の辞書も例外ではない。従って、a-で始まる語が最初に来る。だいたい a で始まり、徐々に abacus 「そろばん」、abandon 「見捨てる」のように並ぶ。

形態論的に考えると、2つの重要な語形変化に注目する必要がある。「屈折」(inflection) と「派生」(derivation) である。

inflection 「屈折」：名詞、動詞、形容詞の文法上の機能に関する語形変化を指す。品詞が変わることはない。語尾変化のみなので、「屈折語尾」とも呼ばれる。

例：動詞の過去・過去分詞：-ed / -en (waited, driven)

形容詞の比較級・最上級：-er/ -est (older, oldest)

derivation 「派生」：語形成 (単語のつくり方) の一つ。語に derivational affix 「派生接辞」を加えることで意味を変え、新しい語をつくり出す。

例：suggest (v) + ion = suggestion (n)

accept (v) + able = acceptable (a)

「逆引きの配列」

「屈折」は「語尾」にのみ起こる。「派生」には、rich「豊かな」(形) →enrich「豊かにする」(動)のように語頭に起こる例もあるが、多くは「語尾」に起こる。そこで、語尾に注目して語尾を基準に語を配列して収録したものが「英語逆引き辞典」である。この辞書は、aで終わる語で始まることになる。最初はa(冠詞)だが、徐々に amoeba「アメーバ」、Mecca「メッカ」、America「アメリカ」のように並んでいく。当然のことながら、-fulのような形容詞が見事に並ぶようになる。同時に、同じ品詞が並ぶという現象も起こる。

wonderful cheerful powerful colorful successful.....

recommendation, foundation accommodation creation
recreation....

geologist psychologist biologist sociologist technologist
zoologist...

「語彙学習上の利点」

上の例でわかるように、「同じ品詞が並ぶ」という配列になることが起こる。-istのような例では、意味の上でもグループ化がしやすい。さらに言えば、語尾が「韻を踏む」ことになる。声を出して読んだ時の rhyming「押韻」の効果は非常に大きい。語尾の押韻を「脚韻」と呼ぶが、連続して「同じ音で終わる」ことで、音の余韻が残る。是非声を出して読むように勧めたい。

「紙の辞書と電子辞書」

このような効果を得るためには「声を出して、連続して見出し語を読む」ということが必要だが、そのためには「紙の辞書」でなければならない。なにより、紙の辞書が持つ「視野が広く、視認性がよい」という特徴が重要なのだ。電子辞書の小さな、狭い窓（モニター）では難しい。数十から百近い各種辞書ソフトを収録し、しかも持ち運びが簡単な電子辞書の至便性は時に実にありがたいものだが、徐々に紙の辞書を絶滅の危機に追いやる危険をはらんでいることも忘れてはならない。電子辞書に収録されている辞書は本来「紙の辞書」として編集・出版されたもので、このまま売れなくなると、新しい辞書の企画・出版は困難になっていくであろう。それどころか、既存の辞書の「改訂」すら予算不足で十分に行われないことも予想される。

「辞書を読もう」

このような状況において、一般的な「英和辞典」はまだまだ需要もあるが、「英語逆引き辞典」はそもそもあまり需要がない。その存在する知らない人が英語の教員にさえ多い。このままでは「絶滅危惧種」に指定されるのではないか。いや、すでに絶滅しかかっているかもしれない。まずは、「辞書を読む」ということを奨励、実践していくことから始める必要がある。

「英語逆引き辞典との出会い」

半世紀ほど前、「英語学概論」と「英語史」を教えていただいた

郡司利男先生は、卓越した言語理論と独創的な言語観で我ら学生にとって異彩を放つ存在であった。ただ、かなり「怖いオーラ」を発していて、近寄りがたかった（大学院で、1メートルくらいの距離で授業を受けた時には毎回緊張で顔が引きつった）。それは学部の「英語学概論」の試験であった。何も書いてない大きな解答用紙を配ると、黒板に一言問題を書いた。「英語逆引き辞典の効用について論ぜよ」——この1問だけであった。もとより、使っていなかった私は「自分の辞書を買わせようという魂胆だな。トンデモナイ問題だ。チクショー、わからねー」と無条件降伏という体たらくであった。

以来数十年、「あれは実に優れた問題であった」と述懐する今日この頃である。恩師の優れた学識と先見性にますます感服し、自らの不勉強を反省している。